
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。無断引用や転載をお断りいたします。
Copyrighted materials of the authors. Works in progress: Please do not circulate
or cite without permission.

アジア太平洋地域における希望の人類学的研究：新たな身体実践が拓く未来

第3回研究会（2025年3月4日開催）報告

日時：2025年3月4日（火曜）13時～18時

場所：東京外国語大学 本郷サテライト 3F セミナールーム

内容：冒頭で代表者の深川が、研究グループの活動状況と今後の研究会計画について、報告をおこなった。その次に、田中によるオートエスノグラフィー、希望、フーコーの告白論をテーマとする研究報告と、松嶋による希望と時間性、ベンヤミンの歴史論、「自然」農法をテーマとする研究報告が行われた。各報告の後に、参加者全員との質疑応答と全体討論をおこなった。告白的オートエスノグラフィーとフーコーの権力論の関係を緻密に考察した田中の研究発表と、ベンヤミンの「歴史の概念について」から福岡正信の自然農法の可能性へと議論を展開した松嶋の研究発表は、個別報告に留まらず、今後の「希望の人類学」研究会のあるべき方向性を大きく指し示すものであった。両者の発表をめぐる全体討論を通じて、メンバー全員でこれから「希望の人類学」を新たに構築していくにあたっての重要な論点を明確化することができた。各報告の概要は、下記の要旨の通りである。

（以上文責 深川宏樹）

報告1

「オートエスノグラフィーは希望の書か？フーコーの告白論を手がかりに」

田中雅一（国際ファッション専門職大学）

希望という言葉は、それこそ抵抗と同じように、いやそれ以上にブラックボックスとなって観念化する可能性がある。抵抗がハードからソフトに、社会運動から日常実践へと拡大して、その意味が凡庸化したのと同じ運命が希望にも待ち受けているのではないだろうか。フィールドで出会う人々がどんなに絶望的な状況に置かれていても、優秀な人類学者ならそこに抵抗を見出してきた。同じく希望を発見することによって、とりあえず仕事は

達成できた、優秀なフィールドワーカーであると証明できた、というような一種の「プチカタルシス」を人類学者たちは抱くことにならないか。また、抵抗論が支配する側の戦略・戦術をブラックボックス化したように、希望研究は単線的な時間概念を不問に付したまま未来をブラックボックス化しようとしていないか。希望は、天から差し込む救いの光でなく、自ら踏みしめて立つ大地として（物質的かつ身体的に）理解すべきであろう。

以上の問題意識を念頭に、本発表では自身のトラウマをテーマとする「告白的オートエスノグラフィー」を取り上げることで、希望概念の可能性を考察したい。

告白的オートエスノグラフィーは、著者自身の身の回りで起こっていること（あるいはそれほど遠くない過去）を記述・分析の対象とし、自分のトラウマあるいはそれに類する被差別体験をどう意味づけるのか、どのように感じるのか、それによってどのような変化が自身に生じるのかがテーマとなる。著者は、しばしばマイノリティに属していて恒常的な差別や暴力の脅威に晒されていたり、DVの被害者であったりする。

フーコーにとって権力は、言動の抑圧・検閲の局面にだけ作用しているわけではない。重要なのは、彼らが語る自身についての真理である。自己についての真理を語ることを通じて、人々を主体化する。キリスト教における告白でもっとも重要とみなされているのが告白する人間の性的行為や性的志向、性的欲望であったが、告白のシステムが司法や医療に拡大する現代において、重要なのはトラウマやトラウマとなった性体験である（『性の歴史1 知への意志』）。

告白的オートエスノグラフィーが希望の書であるためには、これが、フーコーの主張するように権力に回収されない可能性を明らかにする必要がある。本発表では、いくつかのテキストを取り上げ、そこにどのような希望が認められるのか、それは主体化によって実現可能な希望なのか、そうでないのかという観点から、検討を加える。

最後にフーコーの告白論に立ち戻って、主体化に抗う自己語りの可能性や、テキストが読者に与える希望について指摘し、オートエスノグラフィーが様々な意味で希望の書であることを明らかにする。

報告 2

「ヴァルター・ベンヤミンと「自然」農法」

松嶋 健（広島大学）

本発表では、まず、「希望」の時間性について、それを過去→現在→未来という時間軸においてではなく、〈いま〉における構えとして捉えることを提案した。これによって、希望を身体性と不分離なかたちで捉えることが可能となる。その上で、「希望」を構成する二つの感覚として、「可能性感覚」と、そのことを自分が具体的に成すことができそうだという効力感としての「自由」の感覚について述べた。これらは、「希望」が語られる通常の社会的文脈における「明るい未来」をめぐる言説において欠けているものであろう。

このような時間性と感覚に深く関わる方法を提示したものとして、ヴァルター・ベンヤミンのテキスト「歴史の概念について」を検討した。そこで批判の対象となっているのは、通俗化した史的唯物論であり、それは進歩史観・生産力史観・技術への信仰・自然の搾取と深く結びついている。これに対してベンヤミンの考える史的唯物論とは、因果の連鎖として捉えられた科学的歴史観に抗して、因果の連鎖を断ち切り、自動的な思考作用を停止させることで、別の歴史の可能性を呼び覚まそうとするものである。こうした「可能性感覚」は、同時代のオーストリアの作家ローベルト・ムージルが、『特性のない男』他の作品において展開したものでもあった。

次に、テクノロジーの進歩と結びついた進化論的な歴史観を停止させ、別の歴史の可能性を現在と出合わせようという試みとして、ミシェル・フーコーの系譜学とデヴィッド・グレーバーとデヴィッド・ウェングロウによる『万物の黎明』を取り上げた。とりわけ、後者において「農耕の起源」に代わって見出された遊戯農耕を、現在における家族農業、市民農園、半農半X、自然農法といった諸実践と出合わせることで、何が浮かび上がってくるのかを考察するというのが本発表の核心部分である。現代における遊戯農耕のヴァリエーションのなかでも、特に福岡正信の自然農法は、「何もしない農」として、ベンヤミンにおける「行為遂行性の停止」と共鳴する。そこから、身体と土が結びついたところにいかなる希望が見出されるのかについて論じた。

質疑応答では、メラネシアやスリランカ、南米における農との類似性や差異についての指摘があり、それを「近代社会」や「国家」との関係でどのように捉えることができるのかについて議論が深められた。また、ナチズムから逃れて亡命しようとし叶わず、最終的に自死することになったベンヤミンの絶望がどこから来ているのかということと、私たちが生きていく上での絶望の源について、両者を通底するかたちで考察することの重要性が確認された。すなわち、「希望の人類学」は「絶望の人類学」と表裏一体のかたちで研究がすすめられるべきであり、このことについて異なる社会の状況を突き合わせながら考えることの意義があらためて確かめられた。